

RECOVERY

ISLAND OKINAWA

リカバリーアイランド沖縄

Vol. 47

PLEASE
TAKE IT FREE

ご自由に
お持ち帰りください

無料

依存症治療最前線

「マーティ・マンと回復者運動」

日本福祉教育専門学校

岡崎 直人

琉球 GAIA

依存症治療最前線

「マーティ・マンと

回復者運動」

日本福祉教育専門学校

岡崎 直人

琉球GAIAのプログラム

GAIA女性専用ハウス



RECOVERY

ISLAND OKINAWA

リカバリーアイランド沖縄は、

依存症から回復したいと願う人たちに、

希望のメッセージと様々な選択肢で、

「あなた」を応援する季刊誌です。

ライトアップされた首里城 2017

2019年に焼失した首里城は現在、来年秋の完成を目指し復建中です。首里城は創建以来、火災や戦火で5回消失してきましたが、その都度人々の強い思いで復元されてきました。何度でも立ち上がる姿は、戦後復興をたくましく歩んだ沖縄県民にも重なるものがあります。

Photo by *Takkja.com*

依存症の回復について論じるときに、マーティ・マンと彼女が立役者となった回復運動(リカバリー・ムーブメント)とか、現代アルコール依存症運動(モダン・アルコールリズム・ムーブメント)は欠かすことができない一幕です。彼女の生涯をたどってみようと思います。

マーティ・マンの生い立ち ヨーロッパでの活躍

マーガレット・マーティ・マン(Margaret Marty Mann)は、AAで長期のソブプラエティを達成した最初の女性とみなされています。

マンは一九〇四年、シカゴの中・上流階級家庭に生まれました。父親はシカゴの下町にある有名な百貨店の重役も務めた人物でしたが、アルコール依存症で亡くなりました。マンは二十代に短期間結婚しましたが、その後はずっとレズビアンでした。「マン」は独身時代の姓ですが、私生活を守るために「ミセス」を使っていました。同性愛に対する社会的偏見は、一九四〇年代から五〇年代のアメリカでは、アルコール依存症と同様に強かつたからです。彼女は女性アルコール依存症者であって、同性愛者で

マーティ・マンと回復者運動

岡崎 直人

精神保健福祉士

日本福祉教育専門学校 精神保健福祉士養成学科 学科長

一般社団法人日本アルコール関連問題ソーシャルワーカー協会 監事



した。
一九三〇年代にアルコール依存症に苦しんでいる恐怖は想像を絶するものです。何かがおかしいという感覚を持っていますが、理論も説明も治療も、どれもうまくいかないようでした。AAも始まったばかりで、まだ広く知られていませんでした。混乱と絶望。依存症者にとって暗黒時代であり、アルコール依存症は死刑判決でした。

アメリカでの治療と ティーボウ医師との出会い

最終的に、友人たちによって、マンはなんとかニューヨークのベルビュー病院に入院し、その後、コネチカット州の五〇エーカーの広大な敷地にある高級な精神保健施設であるブライスウッドに、治療費を免除された慈善患者として入院しました。

マンは精神科医のハリー・ティーボウの精神療法を毎日一時間受けました。ティーボウはマーティに、もう二度と酒は飲めないと主張し続けました。彼女はそれを受け入れることができず、彼の意見を否定しました。彼女にとって禁酒は「灰色の、灰色の、灰

色の死」の宣告だったのです。彼女はティーボウに激しく反論しました。「飲まないで誰と過ごすのよ! 何ができるのよ! どこに行けばいいのよ!」彼女は他の生き方を知りませんでした。

週末には外出許可を与えられ、街に出ました。マンは毎回自信を持って「飲まない」決意を試す準備をし、何回かの外出には成功しましたが、やがて酔って帰院するようになりました。数ヶ月の治療の後、繰り返される飲酒にさじを投げたティーボウは、これ以上の改善がない場合は、退院させなければならないと彼女に告げました。

そんな一九三九年初頭のある日、ティーボウは興奮してマンを家に呼び、独自の新しいプログラムであるアルコホーリクス・アノニマスというアルコール依存症の小さなグループによって書かれた新しい本の出版前の原稿を彼女に見せました。ページをめくりにながら、マンは希望を感じました。彼女は本の中の神や宗教的な言葉に懐疑的でしたが、グループが約束した回復の希望は、全く医療の専門外の方法を通じて、調べる価値があるように思われました。

あるという二重・三重の偏見の中で生まれました。

マンは一九三〇年にヨーロッパに渡り、パリでアメリカの有名な作家であるガートルード・スタインのサロンを訪問し、ヴァージニア・ウルフなど著名な文化人と交流しました。そして、『ヴォーグ』などの有名雑誌の編集者、美術評論家、写真ジャーナリストとして活躍しましたが、アルコール依存症となり、仕事を続けることができないほど飲酒し、ロンドンでホームレスになるほどで、自殺を図り、精神科病院に入院し、友人たちからアメリカへの帰国を勧められました。

マンの帰国と治療

マンの帰国の様子については次のようなエピソードが残されています。

何百人ものエレガントな乗客が、巨大な豪華客船であるクイーンメリー号で一九三六年のニューヨーク市のドックに着きました。騒々しい群衆の中で、マーティ・マンの母親と妹は首をかしげ、マーティが現れるのを待っていました。ヨーロッパで六年間過ごした後、素晴らしい社交界でのデビューを遂げた女性

初めてのAA参加

ティーボウはマンをニューヨーク市行きの電車に乗せました。今回、マンは慎重ですが楽観的でもあり、最初の「ミーティング」で何を発見するのを考えていました。

一九三九年の肌寒い4月の夜にマンハッタンに到着したマンは、ガタガタと音を立てる地下鉄に乗ってブルックリンハイツのウィルソンの家に向かいました。最初、緊張していた彼女は、ビル・Wの妻ロイスが居間のグループに加わるように彼女をなだめるま

は、どのように成長したのでしょうか?

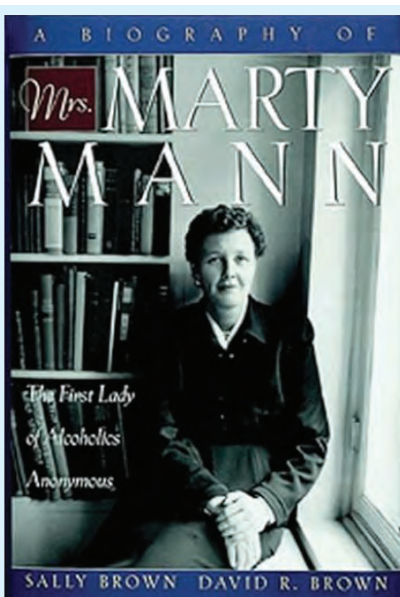
乗客の流れが途絶えがちになりました。彼女はどこにいたのでしょうか? 最後に、何人かの乗組員が通路に現れ、ストレッチャーを運んできました。それがマーティで、彼女は意識を失い、酒臭がしていました。

マンが帰国するために借金をする必要があったのを家族は知らなかったのです。彼女はかつて成功した広告会社の重役であり、きらびやかな社交界の名士でしたが、彼女の飲酒は長い間コントロール不可能で、すでに二回の自殺未遂を図っていました。彼女は船上では帰国して落ち着くつもりでしたが、アメリカ大陸が見えるまで、船内の豪華なアルコール調のバーで酔いつぶれて気を失っていました。母親はすぐに入院先を見つけました。

帰国したマンは精神科医を訪ねてまわり、六人以上の医師に会いましたが、当時盛んであった精神分析を行う医師たちは依存症を精神医学的治療の適切な対象とは考えていなかったもので、誰も彼女を引き受けませんでした。彼女はホームレスになり、ブラックアウトからブラックアウトへ、飲酒から飲酒へと過ごし、安息を得られませんでした。

で、2階に隠れていました。

AAミーティングに参加した彼女は、すぐに紛れもなく自分が正しい場所にいることを感じました。「私は彼らの話を引きとり、彼らは私の話を引き継ぎました。私たちはお互いの言葉を話したのです。そこは見知らぬ人たちの居場所ではなかったのです。彼らは私と同じだったのです。」



参考文献 マーティ・マン伝(サリー・ブラウン、デヴィッド・R・ブラウン著)

マンのスリップ

その後、マンはA Aにつな
がったのですが、スリップも
経験しました。一九三九年の
クリスマス直前、彼女は激し
く酒を飲み始めました。一週
間、彼女はハーレムで酒飲み
友だちと隠れて過ごしまし
た。彼らはついには彼女にう
んざりし、彼女をタクシーで
家に送りました。友人のグレ
ニーと他のA A仲間、彼女
を再びベルビュー病院に入院
させましたが、今度はアル
コール依存症病棟に入院さ
せ、解毒させました。マー
ティがブラックアウトから覚
めたのは翌日の日曜日です
た。その病棟は、彼女が聞い
ていたとおり、ひどいもので
した。患者はホールでマツト
レスの上に寝かされていまし
た。嘔吐している患者もいま
した。別の患者は恐ろしい幻
覚を見ながら叫んでいまし
た。

恐ろしくなったマーティ
は、こっそり、病院を抜け出
しました。酒屋は開いていな
かったため、彼女は総菜屋で
六本入りのビールを買い、
ソーパーを続けられず、飲み
仲間を歓迎しているA Aメン
バーだった女性のアパートに

行きました。二人は酒を飲み
続けました。

マーティが酒を買いに出か
けたときに、彼女は自分のア
パートの前を通りました。
のつぼでやせ細った哀れな人
物が、前かがみになって郵便
受けの名前を確認していまし
た。ズボンはみずばらしく、
上着の袖は短く、袖口は擦り
切れていました。ビル・ウィ
ルソンでした。「ここで何を
しているんです？」マーティ
は尋ねました。「君を探して
いたんだ。話してくれないか
い？」「飲んでいるのよ」
「それは分かっているよ。君
の家に上がっていいかい？」
「いいわよ、私が飲み続けら
れるならね」

彼はポケットから紙切れを
取り出しました。「ロイスか
らのメモだ。もしよかったら
、また来てほしいんだ」。
ロイスのメモには、「あなた
を愛しているから、ここに來
てほしい」と書かれていまし
た。当時、ウィルソン一家は
ホームレスでした。冬でした
が、彼らはポコノ山脈にある
A Aメンバーの母親の所有す
る夏用の別荘に滞在していま
した。「あまり快適ではない
よ。」

「もし病院に入りたいな

ら、タウンズ病院に入院するた
めの資金を僕らの間で集めたん
だ」。ビルはポケットからしわ
くちゃの一ドル札と五ドル札を
取り出し始めました。タウンズ
病院は高額で、入院保証金は百
ドルほどでした（二〇〇〇年の
ドル換算で「二二〇〇ドル」）。
マーティは、ニューヨークの小
さなA Aグループが、誰も大し
たお金を持っていないのに、ク
リスマスに何とか彼女をタウン
ズ病院に入院させるだけの現金
を用意したのだと思うと、胸が
詰まりました。「いいえ」マー
ティは恥じ入って顔を背けまし
た。「私はあなたとロイスと一
緒に行きます」。そうしてマー
ティはポコノに向かいました。
寒さは厳しく、小屋の壁には断
熱材が入っていませんでした。
壁の隙間から日の光が見えまし
た。彼女はとても具合が悪かつ
たので、ビルは彼女を休ませま
した。体調の回復まで三日かか
りました。

マンの夢

その後、マンはA Aに復帰
し、ゆつくりと成長していた初
期のA Aの交わりに身を投じま
した。ビルとロイス・ウィルソ
ン、マン、および他の数人は、
新しいA Aミーティングの開設

マンの計画

一九四〇年、第二次世界大
戦は激しさを増し、マンは新
しい仕事で、アメリカの歴史
に関するラジオ番組を制作し
ていました。その番組では、
精神障害者の非人道的な扱い
に反対する全国キャンペーン
を主導して一九世紀後半に活
躍した看護師のドロテア・
ディックスを特集し、マンは
深く感動しました。アルコー
ル依存症者に同様の戦いが
あったらどうだろうと考えま
した。

すぐに彼女は真夜中にひら
めき、目を覚まし、タイプラ
イターに駆け寄り、アルコー
ル依存症は道徳的欠陥ではな
く病気であることを国民に納
得させる全国キャンペーンの
詳細な計画を書き上げまし
た。

彼女の計画は、科学者や医
療専門家だけでなく、社会全
体に手を差し伸べることでし
た。彼女のプロジェクトはア
ルコール問題の医療化では
した。彼女はアルコール依存
症を他の病気と同じように、治
療される病気にしたいと考え
ました。

一九四一年、米国公衆衛生
局は、アルコール依存症を不



道徳な行動ではなく公衆衛生
上の問題とする重要な出版物
を発行しました。アルコー
ル問題の専門家のグループはま
た、アルコール問題に関する
研究評議会と呼ばれるグルー
プを設立しました。イエール
大学では、研究評議会に関与
する一部の研究者がすでに研
究を開始し、州レベルの擁護
に従事し、アルコール依存症
についての新しい科学的ビ
ジョンを促進しました。
マンはイエール大学の研究
者とながりました。それは
マンの才能を認めたE・M・
ジェリネックという優秀な研
究者でした。マンは驚くほど
才能のあるスピーカーでし
た。彼女の能力は比類のない
ものであり、A Aの成長する
フェロシップにおいて確固
たる基盤を固めました。回復
中のアルコール依存症者とし
て自分自身を公言することを
いとわぬ魅力的な上流階級
の女性として、彼女はアル
コール依存症者というのは社
会の底辺のホームレスという
社会的に支配的なステレオタ
イプを打ち砕きました。

全米アルコール依存症評議会 (NCA) の設立

一九四四年十月、マンは
ニューヨークで記者会見を開
き、アルコール依存症と戦う
ための新しい全国組織を発表
しました。キャサリン・ヘブ
パインのような、中西部のな
まりをほんの少しだけ持つ、
威厳のある高学歴のアクセ
ンで、彼女は参加した四十五
紙の新聞を魅了しました。

マンは、やがて「全米アル
コール依存症評議会(NCA)」
として知られるようになった
組織が、何よりもまず「アル
コール依存症は病気である」
ことを国民に納得させるキャ
ンペーンに着手すると発表し
ました。

記者会見に関するニュース
は、その後四十九週間にわ
たって掲載されました。タイ
ム誌はその月にマンに関する
特集記事を掲載しました。一
年足らずの期間で、彼女は全
国で四十九以上の講演を行
い、彼女の認知度は上昇しま
した。後年、彼女は定期的に
年間二〇〇回以上の講演を
行ったのです。彼女はどこへ
行っても、アルコール依存症
を病気として教える公教育
キャンペーンを行う「アル

マンの主張

コール依存症情報センター」
の設立および発展を奨励しま
した。

マンの主張は次の五点にま
とめられます。

- 一 アルコール依存症は病気
である。
- 二 アルコール依存症者は病
人である。
- 三 アルコール依存症者は助
けることができる。
- 四 アルコール依存症者は助
ける価値がある。
- 五 アルコール依存症は公衆
衛生上の問題であり、した
がつて公的責任である。

ヒューズ法の成立

一九六八年、A Aメンバ
ーで、回復したアルコール依
存者と公言するハロルド・
ヒューズが上院議員に選出さ
れた時、マンとNCAは喜
び、彼はアルコール依存症に
関する連邦法制定のために働
き始め、マンが議会で証言す
るように手配をしました。

一九七〇年、議会はヒュー
ズ法として知られる包括的な
アルコール依存症法を可決し
ました。ニクソン大統領は、
法案を握りつぶそうとしまし
たが、土壇場でマンの旧知の



ビル・W

ビル・ウィルソン (Bill Wilson) はアメリカ発祥のアル
コール依存症を克服するための
自助グループ「アルコホーリク
ス・アノニマス A A」の共同
創設者のひとり。飲酒の克服の
ために12ステッププログラムを
開発した。
また、ビルの妻ロイスはアル
コール依存症の家族等向けの自
助グループ「アラノン」の創設
にも尽力した。

の支援のためにクリブラン
ドに車で出かけました。A A
メンバーたちの前で、マンは
「いつの日か全国を旅して、
すべての町でA Aミーティン
グを見つけないかと思いませ
んか？」と冗談を言いました。
それは冗談で、百人ほどの
人々は笑い倒れました。しか
し、マンにとって、それは冗
談半分でもあり、真剣な話で
もありました。彼女たちの集
まりであるA Aグループで
は、メンバーは再発し、死
んでしまう人たちもいました。
確かに彼らにできることはた
くさんあったのです。

依存症治療最前線

The Most Advanced Addiction Treatment

共和党議員からの働きかけで、一九七〇年の議会最終日の最終法案を署名するように大統領に政治的圧力をかけました。これは、アルコール依存症に関する最初の重要な連邦法であり、この法案により「アルコール乱用とアルコール依存症に関する国立研究所（NIAAA）」が創設されただけでなく、財源の確保と今日の依存症治療システムの基礎が築かれました。

理解作戦

一九七六年四月、さまざまな分野の有名人や専門家など五十人以上が記者会見で、アルコール依存症から回復したと発表しました。このイベントは、NCAの年次会議の一環として、組織されました。この日、俳優、政治家、ジャーナリスト、スポーツ選手、医師、弁護士、パイロット、聖職者、さらには宇宙飛行士と「インドの首長」が「理解作戦」に参加しました。ワシントンDCのホテルのボールルームにアルファベット順に並び、一人一人が立ち上がって自分の名前を発表し、「私はアルコール依存症です」と付け加えました。

マンの業績

一九八〇年、マンは自宅で脳卒中を患い、その後すぐに亡くなりました。マーティ・マンの死亡記事はニューヨークタイムズに掲載されました。

多くの批評家が指摘しているように、AAは当初、白人、プロテスタント、中年の専門職の男性によって創設され、当時の女性にとつて参加することは容易ではなかったのです。その頃、女性のアルコール依存症の一般的なステレオタイプは、性的にだらしない、怠慢な母親、男性よりも重症で、治療が難しいというものでした。そうした中でマンはAAにつながり、その後のアルコール依存症に対する社会的な啓発活動に多大な影響を及ぼしました。今日のAAでは男性と女性の比率はほぼ二対一となっています。

参考文献 マーティマン伝(サリー・ブラウン、デヴィッド・R・ブラウン著)

書籍の紹介

【アルコールクス・アノニマスの歴史】

アーネスト・カーツ(著) 明石書店
岡崎直人・葛西賢太・管仁美(翻訳)



断酒に取り組む自助グループ、アルコールクス・アノニマス(AA)の年代記。回復体験の中から自分の弱さ、不完全さを受け入れ、疎外と孤独から生まれる仲間との繋がりが綴られています。

【知っておきたいアルコールと薬物の真実】

岡崎直人(著) 福音社



アルコールや薬物を誤った用い方をすることで依存症になりうる危険性と依存症からの回復を「対話形式」で分かりやすく説明した中高生向けの副読本です。

【米国アディクション列伝】ジャバンマック

ウィリアム・L・ホワイト(著)
岡崎直人・鈴木美保子(他)(翻訳)



アメリカにおけるアディクション治療と回復の歴史を網羅的に解説されています。



琉球GAIAのプログラム

琉球GAIAの朝は清掃や食事作りから始まります。午前中はミーティングやセミナーなどの座学が中心で、午後は運動プログラムで汗を流しながら心身の回復を目指します。また退寮後も余暇時間を安全で有効に過ごせるように趣味や楽しみをが見つけることが出来るようなプログラム作りを心掛けています。

さらにレクレーション・食事会・自然体験合宿なども取り入れ、非日常を楽しむことも出来るように配慮しています。

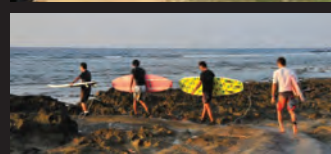
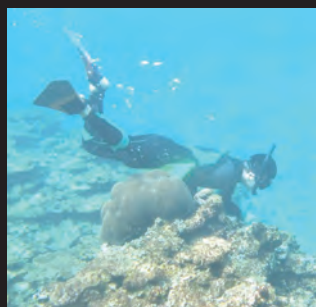
午前のプログラムの様子

午前中はミーティングやセミナーなどの座学が中心です。認知行動療法や12ステップセミナーなどで依存症について理解し、依存症から回復するためのスキルアップを目指します。



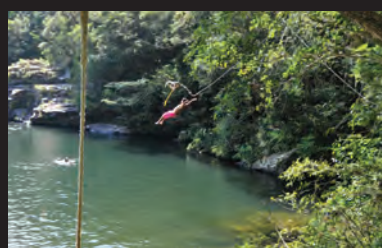
午後のプログラムの様子

午後は身体を動かすプログラムです。ジムやウォーキング、パークゴルフなど仲間と楽しみながら汗を流します。また、今後余暇時間の有効な活かし方を目指し、パズルや畑作業などの趣味に繋がる活動も取り入れています。



その他の活動

レクレーション 食事会 自然体験合宿



家族会・季刊誌

琉球GAIAの家族会は東京・兵庫・沖縄の3か所で開催しています。依存症について理解を深め、本人へ効果的な対応をができることが目的です。季刊誌「リカバリーアイランド沖縄」は年4回は発刊しています。ホームページにも掲載していますので是非ご覧ください。



琉球GAIA 女性専用ハウス

琉球GAIAでは女性専用の宿泊施設も準備しています。これまで20名以上の女性が共同生活をしながらプログラムに取り組み社会復帰を果たしています。現在は3人の利用者が在籍し、女性ハウス卒業生に常駐してもらい、職員が交代で寝泊まりしながらサポートをしています。（令和7年6月時点）

今後は、女性のより良い回復を目指し女性専用のプログラムを強化する予定です。職員も個々のスキルアップを目指し、専門講師を招聘してトラウマインフォームドケアやハームリダクションの視点を持てるような研修を開催し、より安心して回復プログラムに取り組めるような環境作りを心がけます。



最上階で日当たりも最高です。キッチンも広くて使い勝手も良いと好評です。屋上も利用可能で、今後は利用者と相談しながら花壇や家庭菜園を作る予定です。また見晴らしも良く地域で開催される花火大会も良く見えるそうです。



部屋数も多くて和室が2部屋、洋間が5部屋あります。交代でスタッフが寝泊まりしながら利用者をサポートします。

琉球GAIA家族支援プログラム

薬物依存症の治療や回復には、ご家族の果たす役割が非常に大きいという事が実証されています。私たち琉球GAIAでは「家族と共に回復する」という理念のもと、ご家族の方にも「家族支援プログラム」の参加を強くお奨めしております。依存症と言う病気をよく理解出来るようになる事、ご本人に対する適切な対応や、コミュニケーションが行えるようになる事、依存症は回復出来るという事をご家族が信じられる事を大きなテーマにしています。また、家族会のグループがオープンであり、他の援助者や、治療機関と連携が取れている事も大切にしている事の一つです。グループに参加することで、ご家族に笑顔が戻り、本人同様、ご家族自身が仲間と出会い、回復を支援する為に必要な知識や情報を共有できる場所となるよう心がけております。

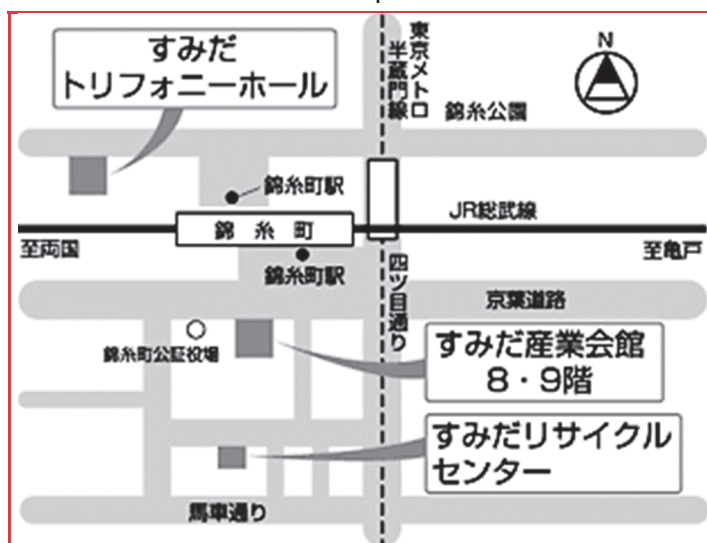
また、グループで学んだ事を実際の生活に活かせるようになるには、個別支援も大切です。個別のカウンセリングを通して個々の問題を整理しながらグループに参加して頂けると、教育プログラムの効果が最大限に発揮されると考えております。

下記の家族会にはどなたでもご出席頂けますので是非ご参加ください。

address

GAIA家族会 会場: すみだ産業会館9階
〒130-0022 東京都墨田区江東橋3-9-10 TEL:03(3635)4351
東京家族会とハイビスカスは、会場も開催日時も異なりますのでご注意ください。

map



information

依存症の問題を抱えた多くのご家族、琉球GAIAのスタッフ、OB、専門家を迎えてのセミナーなど、依存症に悩むご家族の方々にとって非常に内容の充実した家族会となっております。毎回40名ほどのご家族が参加されておりますが、初めてお越しの方でも参加しやすいようなアットホームな雰囲気作りを心がけています。

すみだ産業会館

土曜日 13時～15時

参加希望の方は琉球GAIAまでご連絡ください。

琉球GAIA:098-831-2174

「ハイビスカス」は薬物依存症や様々な問題を抱えた娘を持つ母親を中心としたグループです。娘とのかかわり方、対応の仕方をテーマにミーティングや勉強会を行っています。一人で悩まずに、同じ問題に取り組んでいる仲間たちと一緒に体験や気持ちを分かち合ったり対応の仕方について勉強しませんか？

場所: 東京都港区芝5-18-2 障害者福祉会館

日時: 毎月第1日曜日

13時～17時 (無料)

参加希望の方は琉球GAIAまでご連絡下さい。

琉球GAIA: 098-831-2174

GAIA家族会

TOKYO

ハイビスカス

TOKYO

大阪家族会

OSAKA

沖縄家族会

OKINAWA

沖縄県内の依存症の問題を抱えたご家族の為の家族会です。琉球GAIAスタッフが中心となり、ご家族の方からの質問や、本人とのかかわりについて具体的に提案する形で行っております。

場所: 沖縄県豊見城市真玉橋135 NPKビル2階
生活訓練事業所「START」

日時: 毎週月曜日(祝祭日は休み)
19時～20時(資料・場所代1,000円)

参加希望の方は琉球GAIAまでご連絡下さい。

琉球GAIA:098-831-2174

関西圏で依存症の問題を抱えたご家族の為の家族会です。元琉球GAIAスタッフを中心として、毎月専門的な講話や家族間での話し合いなど、充実した内容の家族会となっております。

場所: 兵庫県尼崎市南塚口町1-5-13

美容院ルーナロッサビル3F

日時: 奇数月の第2月曜日 15時30分～17時

参加希望の方は琉球GAIAまでご連絡下さい。

琉球GAIA:098-831-2174

琉球GAIAの活動にご賛同、ご支援頂きますれば誠にお手数ですが同封しております振込依頼用紙にてお振込み下さるようお願い申し上げます。なお誠に勝手ながら、献金の振込依頼用紙はすべての方に同封させて頂いています。寄付献金を強要しているものではございませんのでご了承ください。

一緒に、考えよう

依存症 のいふ。

依存症は回復できます。

RECOVERY

ISLAND OKINAWA

2025年6月発行

発行|特定非営利活動法人アルコール・薬物依存症
リハビリセンター琉球GAIA

〒900-0024 沖縄県那覇市古波蔵1-18-37

TEL : 098-831-2174 FAX : 098-831-7174

MAIL : mail@ryukyu-gaia.jp



GAIA



START

薬物・アルコール依存症リハビリセンター琉球GAIA

【GAIA東日本相談センター】

☎ **03-5800-5121**

【GAIA西日本相談センター】

☎ **06-6433-5111**

【沖縄ケアセンター琉球GAIA】

☎ **098-851-3535**

フリーペーパー（無料）です、ご自由にお持ち帰りください。